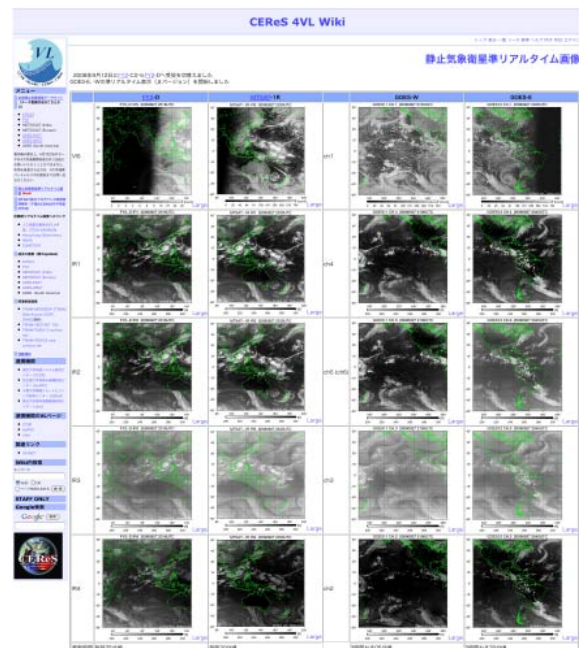




アジア・大洋州地球科学学会 (AOGS) 2009 参加報告

第6回目となる AOGS (Asia Oceania Geosciences Society) 2009 が、8月 11-15 日にかけてサンテック・シンガポール国際会議展示場で開催されました。筆者は、AMY - a coordinated Asian Monsoon Experiment セッションの中で、4 大学連携バーチャルラボラトリー (VL) の一環として推進している静止気象衛星データセットの紹介を行いました。また、同会場で開催された AMY Workshop に樋口准教授の代理として出席し、同データセットの整備状況および準リアルタイム画像提供 (右図) について報告しました。今回は、アジアモンスーンに関するセッションが複数あり、衛星を利用した降水科学のセッションも開催されるなど連日盛りだくさんの発表があり、情報の交換や、最新の知見を得ることができました。また、大学院生時代に机を並べ切磋琢磨した Dr. B. C. Bhatt 氏とも再会し、旧交を温めることができました。

来年は、7月 5-9 日にインドのハイデラバード国際会議場で開催が予定されています。本発表に際しては、文部科学省特別教育研究経費「地球気候系の診断に関わるバーチャルラボラトリーの形成」の支援を受けました。ここに記して感謝いたします。(山本宗尚)



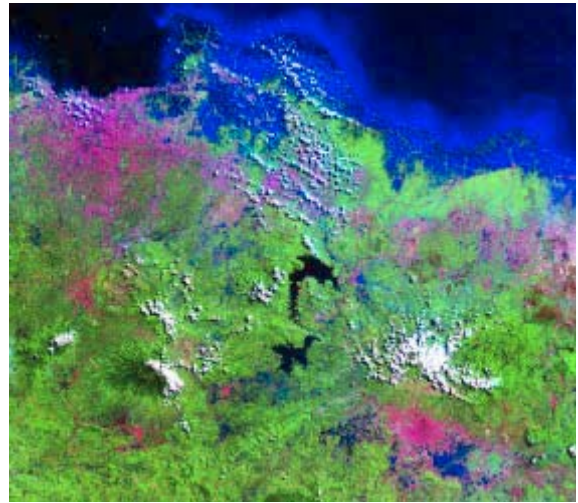
図：CEReS VL で公開している静止気象衛星準リアルタイム画像 web ページ (<http://www.cr.chiba-u.jp/~4vl/>) .

海外便り ーインドネシアにおける統合的流域管理ー

7月20日から25日までインドネシア、ボゴール、バンドンに出張しました。2007年10月号でも紹介した JSPS 二国間交流事業の最終年度の訪問であり、統合的流域管理に関するワークショップ参加およびインドネシアにおける統合的流域管理の現場を視察してきました。

ワークショップは“Building the capacity of stakeholders for saving watershed”のタイトルでボゴール郊外のリゾートホテルにて開催されました。その課題である統合的流域管理は水文学の最重要課題の一つであり、流域における水利用や土地利用、水災害を包括的にとらえ、様々なセクターの間で折り合いをつけることが求められますが、なかなか実現困難な課題です。セクター、ステークホルダー間での対話自体がその解のひとつでもあり、水に関わる研究自体は重要だが主要な目的ではなくなる。研究者、特に自然系の科学者の役割は流域で起きる諸事象を明らかにすることだけではなく、社会との関連性を意識し、成果が流域管理のために役に立つようにすることです。統合的流域管理はまさにモード2であり、異分野協働による新しい知識生産の営みになっています。実は講演の多くはインドネシア語でしたので、内容は完璧に把握できませんでしたが、政治、行政、研究セクターと水に関わるステークホルダーといった様々な立場の方々の熱い議論の様子を伺っていると、このような思いが伝わってきました。

この思いは、出張後半に訪れた Jatiluhur ダムの管理事務所における話で確信に高まりました。このダムはジャカルタ市東部に流下するチタラム川にあり、バンドンの下流にあるダム群の最下流のメインダムです。このダムでジャカルタ地域の用水の90%を賄っているというのですが、87%が灌漑に使われています。配水のための水路のメンテナンスは地域住民と共同で行うとのことですが、人と水が分断されていない状況、また様々なステークホルダーとの調整機能を目の当たりにして、統合的流域管理は日本よりインドネシアが進んでいるとも見なすことができるのではないかとの思いも湧いてきます。



画像： 2000年のジャワ島中西部のTM画像。左上と右下のマゼンタ色の部分がジャカルタとバンドン。ジャカルターバンドン間に二つの大ダムが見えるが、下流側（北側）が Jatiluhur ダム。



写真：
チタラム川、Jatiluhur ダムの巨大な取水口。

なお、移動途中で訪れたバンドンの Research Center for Geotechnology、LIPI (Indonesian Institute of Sciences) では会議室に集まった面々の中に、千葉大学の卒業生、学位取得者が四人いました。この関係性を大切にしていかねばとの思いを新たにしています。(近藤昭彦)

環境リモートセンシング研究センター発足以来の活動

環境リモートセンシング研究センター(CEReS)では定期的な外部評価を行うと同時に、不定期に学内でも学長、理事にセンターの活動の説明を行っています。これらの評価、説明の資料として CEReS 発足以来の各種統計を図表として準備しましたので、ここに掲載いたします。

- 予算： 年間 6000 千万円～1 億円の間で変動している。最近は約 8000 万円程度である。
- 審査論文： 年間 30～60 編の間で変動している。
- 専任教員+技官： 2001 年度の 16 名から 2007 年度の 10 名まで減少傾向にあったが、2009 年度後半、助教 1 名が補充され、11 名となる予定である。
- 専任以外の常勤研究者： 寄附研究部門客員教員、ポスドク、特任教員など
- 総研究者数： 20 名前後を推移している。
- 共同利用研究件数：年間 30～50 件の間で変動している。最近の 6 年は増加傾向である。
- M コース学生： 約 20～30 人前後である。
- Dr コース学生： 約 20～30 人前後である。
- 学生数合計： 卒研生、大学院生、研究生の合計で 60～100 人の間で変動しており、最近は約 80 人である。
- 学内衛星データ download： 年による変動が大きいが増加傾向である。
- 学外衛星データ download： 年による変動が大きいが増加傾向である。

環境リモートセンシング研究センター発足以来の各種統計

	1995	1996	1997	1998	1999	2000	2001	2002	2003	2004	2005	2006	2007	2008
予算(千万円)	18	56	28	25	21	21	16	20	19	20	13	17	19	25
審査論文(編)	25	37	33	36	45	59	52	54	31	37	53	41	33	35
専任教員+技官(人)(a)	15	16	16	16	16	16	16	15	15	13	13	12	10	10
専任以外の常勤研究者(人)(b)	0	2	5	6	5	6	6	3	5	4	7	4	7	11
総研究者数(人)(a+b)	15	18	21	22	21	22	22	18	20	17	20	16	17	21
共同利用研究件数(件)	19	44	66	50	53	33	33	30	35	36	36	43	45	48
Mコース学生(人)			29	33	32	28	28	30	27	24	17	25	37	18
Drコース学生(人)			26	26	28	30	23	24	30	26	25	26	22	31
学生数合計(人)			85	86	96	90	82	78	91	69	60	68	79	81
学内衛星データdownload(万シーン)											14	33	69	42
学外衛星データdownload(万シーン)											1	16	5	14

